聖霊降臨節第18主日礼拝説教「わたしたちは《神の家族》」

日本基督教団石神井教会　2016年9月11日

【旧約聖書日課】歴代誌下　7章11～16節

11ソロモンは主の神殿と王宮を完成し、この神殿と王宮について、行おうと考えていたすべての事を成し遂げた。

12その夜、主はソロモンに現れ、こう仰せになった。「わたしはあなたの祈りを聞き届け、この所を選び、いけにえのささげられるわたしの神殿とした。13わたしが天を閉じ、雨が降らなくなるとき、あるいはわたしがいなごに大地を食い荒らすよう命じるとき、あるいはわたしの民に疫病を送り込むとき、14もしわたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、ひざまずいて祈り、わたしの顔を求め、悪の道を捨てて立ち帰るなら、わたしは天から耳を傾け、罪を赦し、彼らの大地をいやす。15今後この所でささげられる祈りに、わたしの目を向け、耳を傾ける。16今後、わたしはこの神殿を選んで聖別し、そこにわたしの名をいつまでもとどめる。わたしは絶えずこれに目を向け、心を寄せる。

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙　3章14～21節

14こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。15御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。16どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、17信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。18また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、19人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。20わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、21教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　10章22～30節

22そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。23イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。24すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」25イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。26しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。27わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。28わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。29わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。30わたしと父とは一つである。」

祈りの交わり

毎週水曜日の午前中の「聖書と祈りの会」が始まって二ヶ月が経ち、進め方も、また、おいでくださる方も、徐々に定まってきたようです。どなたにも、都合のよいときにおいでいただきたいと思っていますが、まだ一度もおいでくださっていない方や、一度きりで二度目が続かないという方も、多いかと思います。曜日と時間が決まってしまうと、どうしても難しいという方もいらっしゃるでしょう。あるいは、一度おいでくださったけれども、進め方が自分には合わないと思われた方もあるかもしれない。ですから、先週の役員会では、「10 月から、ほかの曜日・時間帯の集会を新たに始めます」と宣言してしまいました。何ができるか、実はまだ、はっきりと決まっていないのですが、どうにかして、一人でも多くの皆さんに、教会の交わりの中で共に祈る歩みに加わっていただきたいのです。

もちろん、日曜日の朝、このように共に集い、あずかる礼拝も、わたしたちの共に祈る歩みに違いありません。何を置いてもこの礼拝に共にあずかるということを大切にしてくださっている皆さんが、今日もここにいらっしゃっている。ここで、教会の共なる祈りの営みに加わってくださっている。その皆さん一人ひとりのお姿を、この礼拝堂で、わたしたちは互いに目に焼き付け合っている。祈りの言葉を共に唱えた、その一人ひとりの声の響きを、わたしたちは、日曜日ごとに確かめ合っている。ここでこそ、わたしたちは、互いに歩調を合わせて祈りの歩みを進めていくように、導かれている。それも、確かなことです。

平日の昼間、わたしは、訪問や特別な用事がなければ、ほとんど、この教会堂で過ごしています。大抵は一階で仕事をしていますが、ときには、この礼拝堂で一人、過ごすこともある。ほとんど、一人で独占していて、誰にも邪魔されません。集会があるときや、土曜日の掃除のご奉仕があるとき、あるいは、奏楽奉仕者がオルガンの練習にいらっしゃるときのほかには、どなたかが平日の教会堂にいらっしゃることはほとんどないからです。もったいないことです。これだけの教会堂を与えられ、礼拝堂を整えられているのです。ここが、もっと皆さんの「祈りの家」として用いられればよいのに、と思います。

もちろん、皆さんは、日々、ご自宅で、あるいは自分だけの特別な場所で、祈りをなさっていると思います。朝夕の祈り、食前の祈りを、欠かさないという方も、きっと少なくないでしょう。その祈りの姿を、ご家族や、周囲の方がご覧になられて、信仰へと導かれることも、きっとあるでしょう。そう考えても、皆さんの日常生活の中での祈りは、大切な意味があります。皆さん自身のためだけでなく、皆さんに与えられたご家族や周囲の方々のためにも、皆さんの日常の祈りの生活は、大切になされなければいけない。何も、あからさまに祈りの姿を見せびらかす必要はありませんが、完全な密室の祈りにしてしまうこともない。わたしたちの、日々の自然な祈りの姿こそが、わたしたちの家族や周囲の人たちを、信仰へと、神の御前へと導く、よい助けとなるのです。

それに加えて、皆さんには、教会の集まりの中で共に祈ることを増し加えていただきたいのです。祈りの交わりに、見える形で加わっていただきたいのです。

「あなたがた」のために祈る

見える形で祈りの交わりに加わる。そのとき、わたしたちの祈りは、逆説的ですが、見えない者との交わりへと大きく広がり始めます。

主イエスは、「**二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである**」（マタイ 18:20）とお教えくださいました。二人か三人の具体的な集まりという、見える交わり、しかも主の名による交わり、つまり祈りの交わりの中に加わることを通して、そこに、見えないはずの交わり、信仰の交わり、神との交わりまでも、見えてくる。主イエスが弟子たちのために残してくださったのは、そのような交わりのあり方、そのような教会の姿でした。

だからこそ、使徒パウロは、手紙を記すときさえ、そこで、読み手との間に祈りの交わりを持ちたいと、願ったのでしょう。どの手紙でも、パウロは、手紙を宛てた教会の人たちのことをおぼえ、その人たちのために、祈りを記しました。「共に祈ってほしい」との願いを込めて、祈りの交わりへと招いたのです。

わたしたちの祈りは、いつでも、自分のための祈りから始まるものです。そして、肉親の家族のために祈ることまでは、自然に進んでいくでしょう。わたしたちは、さらに、祈りの交わりへと加えられるに従って、信仰の仲間のために祈るようにされて行きます。信仰の仲間を、そればかりかすべての者を、神の御名のもとに一つにされた《神の家族》として憶え合い、祈り合うようにされるのです。

わたしたちは、そのような祈りに憶え合う交わりを与えられていることを、喜びたいのです。そして、《神の家族》として、互いのことを憶えて祈り合う祈りの言葉を、身に着けたいのです。パウロの祈りに倣い、祈り始めたいのです。

パウロが書き記して送った祈りの言葉の内容は、決して難しくはないと思います。解説しなくても、皆さん自身が、何度でも口に出してお読みくださり、味わっていただけばよいのだと思います。そして、皆さん一人ひとりの、ご自分の祈りの言葉としてくだされればよい。ちょうど、主イエスがお教えくださった主の祈りを暗誦しているように、また主イエスが様々な場面で祈られた祈りの言葉を暗記しているように、わたしたちは、パウロを初めとする信仰の先達の祈りの言葉を、憶えてしまうほどに繰り返し唱えてみても良いと思います。

「他人の祈りの言葉など、自分では唱えたくない」と思われるかもしれません。確かに、借り物の言葉をいくら唱えてみても、口先と心とがバラバラになってしまう。いくら良い言葉であっても、他人の言葉は、なかなか自分のものにはならないものです。それよりは、つたなくても自分の言葉で祈ったほうが、真実に自分の祈りの心を表しているようにも思える。そういうこともあるかもしれない。

けれども、私たちの祈りとは、自分の心の中から湧き出てくる思いの丈を言い表せば、それで、本当に祈りとなるのでしょうか。そういった祈りは、祈りの形の独り言に終わってしまうことが、あるのではないでしょうか。祈りの形の、周囲の人に対する訴えで終わってしまうことが、あるのではないでしょうか。

わたしたちは、知らない言葉を口にすることはできません。信仰の先達は、パウロは、わたしたちに、祈るべき祈りの言葉を、与えてくれるのです。

キリストの住まうところになるように…

パウロは、こう祈るのです。あなたがたが、天の父なる神の霊により、力によって、内なる人を強められるように。信仰によって、心の内にキリストを住まわせていただくように。そして、そうすることによって、愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としていただくように。そのように祈るとき、パウロは、わたしたちの心の内で、キリストという内なる人が力強くお働きを始めてくださることを期待し、祈っています。しかも、それは、わたしたちに内の一部をキリストが占めるというような、ケチな話ではない。**キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり**、と言うのですから、わたしたちの内に宿るキリストが、その愛が、わたしたちの考えを越えるほどまでに大きく豊かになり、わたしたちの内を占めてしまうようになることを、期待して、祈っているのです。神の満ちあふれる豊かさに満たされて、わたしたちの内が、わたしたち自身のものではない、神のものによって充満することを、期待し、祈っているのです。

キリストが、わたしたちの心の内においでくださり、わたしたちの内側を大きく占めてくださる。わたしたちの小さな思いによってではなく、その豊かな愛で満たしてくださる。そのとき、わたしたちは、内に宿るキリストが祈るべき言葉を与えてくださることを知るようになるのではないでしょうか。わたしたちの心の内で、自分の小さな思いを訴える言葉が充満するのではなく、キリストが祈るべき言葉を与えてくださる。神の御前に立つことのできる祈りの言葉を与えてくださる。そのことを知るようになるのではないでしょうか。

世界的に有名なテーマパークで園内を走り回っている着ぐるみのキャラクターたちは、まるで、本当に生きているようです。着ぐるみであることは明らかなのに、来園客は大喜びをして追いかけ回す。サインまでしてもらう。風船を欲しがらない大人たちでも、心を奪われていました。キャラクターの魅力そのものだけによるのではないと思います。その着ぐるみを着て、その中でそのキャラクターに命を吹き込んでいるスタッフの努力の結果でありましょう。それが、何よりも重要なのではないでしょうか。

キリスト者は「着ぐるみ」のようなものだと言ったら、おかしいでしょうか。けれども、わたしたちの内でキリストがお働きくださるということは、そのような「着ぐるみ」としてわたしたちが生きる、ということなのだと思います。わたしたちの頭のてっぺんから足の先まで、指先の一つひとつまで、わたしたちの内側に入って、それを十分に満たしてくださる方、キリストがお働きくださるときに、本当にわたしたちの生きるべき命が吹き込まれるのです。それをしてくださるのが、キリストであり、キリストをお送りくださる神の恵みなのです。

このことを祈り願い合う祈りの交わりの中に、わたしたちは招き入れられました。祈りの交わりを通して、信仰の先達の祈りの言葉に倣い、主の御言葉と御業のお働きくださる器としていただく。御父の御心のもとに同じ心を与えられ、それぞれに異なるキャラクターを持つ一人ひとり。それが、《神の家族》なのです。